＊⑩山形宿にかなりの集落がみられ、⑪豊姫社と⑫西念寺（昭和八年に大坪村古賀へ移転）が描かれています。

＊⑬久良木村の名が見え、村の東に乙姫神社の社殿と鳥居が見られます。伊万里道から分かれた道路が山形宿から黒尾岳川を横切って久良木集落に通じ、さらに村中央を「峠道」となって続いています。

＊⑭藤川内村に⑮光雲寺があり、また村の両端に「大山口の堤」と「マサカの堤」があります。残念ながらどの村にも「窯跡」が描かれていません。

＊⑯金石原の集落を通って伊万里道が伸び、⑰波瀬峠へ通じています。

＊南に⑱中野原村が広がっていて、中央に⑲熊野権現社が祀られていますが、村の入口の黒尾岳川畔にも⑳「天神」社があります。

八、『松浦町の雨乞い三奇石』

祈雨伝承の〝牛石・龍石・亀石〟

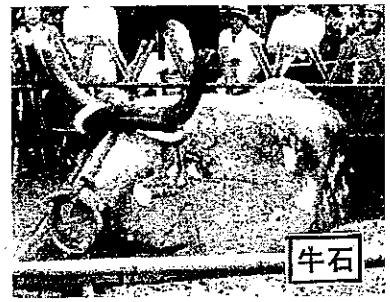
①【牛石の事】提川の大陣岳の中腹によく知られた「牛石」があります。ここで昔から雨乞いの祈願が行われてきました。牛の形をした牛石に鼻輪や角をつけ、するめをたわしにして酒で洗うという珍しい行事です。

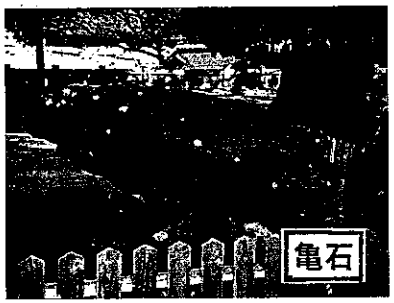
この「牛洗い」とよばれる雨乞いは寛政六年（一七九四）に最初に行われたと当時の碑文に刻んであります。この年は五月から百日近く日照りが続き伊万里郷内でも各地で雨乞い祈願が行われたと古記録にあります。その後も干ばつの年に実施されてきました。（→石造編、神社編、民俗編）

②【龍石の事】中野原・上分区にあり、高さ一五〇㌢、幅二〇〇㌢ほどの自然石で、碑文は風化して判読が困難ですが「大干ばつのため住民が非常に心配してあちこちでお詣りがあり、この村でも庄屋が諸僧に・・詣・・龍石（池）・・演じ・・夜中より風向きがかわり雨風が吹き黒雲がたれて、嗚呼なんと不思議、なんと有り難いことか、翌日大雨となり・・・」といった意味のことが記されています。

龍石か龍池（近くにあったという）の前でなにかを演じて降雨を祈願したと思われます。残念ながらこの石の設置年代がわかりませんが、石の状態からかなり古いころのことと考えられます。

③【亀石の事】桃川の諏訪神社の境内に亀の形をした、堅質で光沢のある石が奉納されています。





きな石に鑿を打ち込んだら、血しぶきが吹き出したので、びっくりして、ただ事ではない、これは竜の化身と悟り「龍石」と呼ぶようになった』このことから雨乞いの願かけ石として祭られるようになったという話があります。

雨乞いには龍石のところまで登って、浮立を打ち込み祈願していたと、村の古老から聞いています。

今まで何回となく雨乞いがあったと思われますが、最も近い時期は、昭和一四年の大旱魃で日照りが続き水が無く稲が枯れ始めた時です。

上分の人たちが総出で浮立を仕立て、砥谷の龍石の前で太鼓や鉦や笛を打ち鳴らし、龍池の竜よ目を覚ませとばかりに浮立を奉納して願いよとどけと祈りました。

また、小石原へ越す偽峠の熊野権現社にも登り浮立を奉納して雨乞いをしたとも聞きます。

人々が万策尽きた時に、願いをかなえるために神さまにすがる心は今も昔も同じに思えます。

岩野の達磨石　大陣岳中腹の南側、岩野の字達磨、標高一五〇㍍の所の草地に玄武岩の自然石が散在しています。その中の大きな石の形が、横たわった牛に似ているところから牛石と名付けられています。

地元の伝承では、『この地を達磨大師が牛に乗って通りかかり、目の前の景色が余りにも素晴らしいので立ち去ることができずに長い時間休んでいたところ、荷をつけた牛や馬が石になったということです』

その石は、山林をぬけ草地に出る所にあります。門石、馬石、鞍石、荷石、牛石と名付けられています。そして、大師碑があります。昔は、達磨松と呼ばれる大きな松があって、これらの奇石の上に枝を張っていたそうです。この話から達磨石と呼ばれるようになったということです。

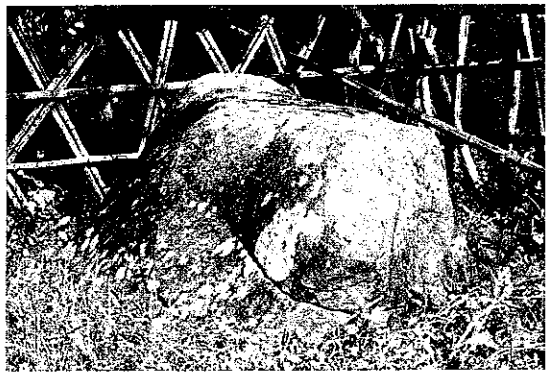
この牛石は、雨乞い祈願をすると叶えてくれる石ともいわれています。土地の人たちは旱魃の時に酒を注いで、するめで洗い清めて雨が降るのを祈りました。

今までに何度となく雨乞い祈祷がなされていたと思います。寛政六年（一七九四年）建立の牛石の雨乞い祈願碑が傍らにあります。それには、次のような意味の碑文が刻まれています。

『吾が松浦縣武雄邑の提川村の野にある達磨松　と呼ぶ松の下に、其の（石）形が似ていて名がついた牛石がある。世間の伝えによれば、酒で石を洗えば雨が降るという。今茲に寛政甲寅の夏、長い間日照り続きのため、雨乞い祈祷をしたが効かなかった。そこで牛石を洗って試したら、俄かに雲が起こり雨が降ってきた。人々は歓声をあげ手をうって喜び、神秘な石によるものと称えた。忘れぬよう鐫文を彫り後世に伝える』と記されてあるようです。

寛政六年は五月から百日に及ぶ旱魃で、鍋島藩主は伊万里香橘神社に（伊万里神社）名代として

是松浦縣武雄邑之提川村野有称達磨松松下有牛石
蓋以其形似得名俗傳以酒洗石可以得雨今茲寛政甲
寅夏旱数旬雩祷無応乃試沃石勃然興雲降雨旁浦衆
庶欣抃嘖嘖称石之神因鐫文堅珉以示不忘云銘曰
非牛之鬼　惟石効霊
至誠所感　可徹頑冥　　本邑士庶協資立石



岩野の牛石（達磨石）

高木左衛門・前田新左衛門の二人を派遣して、雨乞い祈願をしたと古文書にあるように、この年は大旱魃で雨乞い祈願後にやっと雨が降ったそうです。住民が歓声をあげ喜んだようすが想像されます。

「森永家記録」にも、明治六年（一八七三年）に牛洗い（酒を注ぎ、するめで洗う）の雨乞い祈祷の記事があります。

また昭和一四年（一九三九年）にも日照り続きで稲が枯れ始めたので、淀姫神社に三日三晩篭って祈願をしました。続いて、達磨石のある広場で篭り祈願をしました。それでもなかなか降りません。

九月一四日に、牛洗いをして雨乞い祈祷をしました。五日後にやっと待望の雨が降ったとのことです。

一途の願いが叶い難を逃れた時の人々の喜びは、寛政の碑文にある「衆庶欣抃嘖嘖」（民衆は歓声をあげ喜ぶ）であったと思われます。

寛政六年牛洗い碑文

諏訪神社の亀石　桃川の諏訪神社の境内に「亀石」という奇石を祭ってあります。土台石の上に自然石を積み、その上に長さ一メートル六〇センチ、幅九〇センチぐらいある、「亀石」が載せてあります。その左に二基の石碑が立っています。自然石の石碑は明治二七年（一八九四年）亀石を創建した時、その由来を記したもので、角柱の石碑は当初の碑文が剥げ落ちて消滅するのを憂い、昭和四四年に建てたものです。

この碑文には、亀石の由来や形状などについて、次のような説明が記されています。

諏訪神社の亀石

『　亀石の事

明治二十七年この歳大旱魃あり　村民大いに之を憂い連日祈る
遂に験あり神官楠木氏ありて一夜を夢む　神託に曰く「八竜瀬
に奇石あり祭りて以って祈るべし」と村民続々相集いて八竜瀬に
至れば果たして一奇石あり　その質堅にして滑らか瑩々として沢
あり　村民大いに喜び之を諏訪社の境内に建て亀石と号す　蓋し
その形亀に似たるを以って名付けし所以なり因りて茲に之が由来
を記す　　明治二十七年一月吉日奉献

頭　取　伊東伊之吉　　斎藤善七　米田五大夫　幸島作平
世話人　原口形左衛門　松尾裕七　松尾半三郎　大崎政七
大崎傳三郎　』

二、牛洗い雨乞い祈願

(1) 牛石の由来

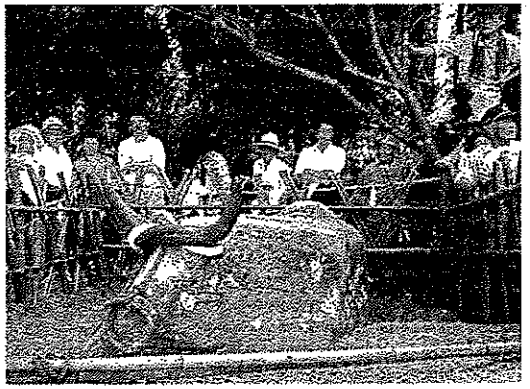
大陣岳（提川）の中腹に玄武岩の転石が横たわっています。地元ではこれを「牛石」と呼び、昔から珍しい雨乞祈願が催されてきました。牛石には、次のような文が刻まれています。

『わが松浦郡武雄領の提川村の野原に達磨松と呼ぶ松下に牛石がある。その形が牛に似ているので牛石という。伝によれば、酒でその牛を洗うと雨が降るという。いま寛政六年（一七九四）の夏は、日照りつづきのため、雨乞いをしたが効かなかった。そこで牛洗いを試みたら、急に雲がおこり雨が降ってきた。人々は感激のあまり手をたたいて、神秘な牛石のききめをほめたたえた。堅いこの石に文を刻んで後世に伝える』

非牛之鬼　惟石効霊　　至誠所感　可徹頑冥　　本邑士庶協資立石

(2) 昭和一四年九月一四日、牛洗い決行のこと。

その年は日照り続きで、稲の枯死するものを見るに忍びず、近くの淀姫神社に提川村中の住民が三日三晩こもり祈願しましたが、雨は一粒も降りませんでした。



牛洗い実演（H6.8.7）

そこで、第二の手段として牛石の横たわっている東広場に、更に三日三晩こもって祈願しましたがその効果も全くなく悲しみにくれました。そこでついに「牛洗い」を決行することになりました。

まず、「牛石」に木製の角をとりつけ、鼻輪をはめて生きた牛そっくりに仕上げました。現場には、「立入禁止」の竹垣をめぐらして準備を整えました。当日は、祈とうをするため、山伏二人を武雄より招き、地元の提川では三方（村分・岳坂・岩梅）から、それぞれ浮立をくり出し登って行きました。また牛洗いのために次のものが用意されていました。

◎酒…三石三斗三升三合…かけ水に使う。

◎スルメ…三十三斤…そうら（たわし）に使う。

牛洗いの要領は、左そうらと右そうらをそれぞれ二人ずつ決め、四人の役が酒を「かけ水」にしてスルメで洗います。他の若者は、近くの池から泥水をくんできて、読経中の山伏の頭上からふりかけ、次に観衆にふりかけ、しばらくはこの山一帯が歓声と賑やかさにつつまれます。酒の量があまり多量で疑いたくなりますが、四斗樽を十樽もかつぎ上げたそうですから、まんざら間違いでもなさそうです。ききめはどうだったのでしょうか。五日目に雨が降りましたが、数年間は牛石の周辺には、草が生えなかったと言われています。

しめこみ姿の牛洗い

(3)　牛洗いの口上（菊文化づくりの指定を受け、模擬祈願祭を実施した時の口上です）

維、時は平成六年八月七日、稀有なる大旱魃と成りし為、提川達磨松の下に於きまして、達磨の牛洗いを致しまする。

茲に口上申し上げまするは、

達磨牛洗い雨乞史跡保存会会長梅岩区長副島哲三が提川区民を代表し、謹んで口上申し上げまする。遺より伝えられし巻物の文句をその儘に申し上げれば「唐の国より御渡りなされたる達磨大師日照り続きの大旱魃となりますれば、三日三夜御祈願致し結願の日と相成りますれば、大師の御乗りなされた牛の御体を洗い清めまする。

酒は三石三斗でスルメは三三斤、水樽三十三樽、人の数は八人、壱人は牛の鼻ぐりを取る。四人のものは右と左に分かれてソーラを取るとありまする。

そこで準備万端整いましたので、これより役割を致しまする。牛の鼻ぐりは豪者梅岩山口勝元氏が取る。今回右ソーラは豪者岳坂溝江龍四郎氏と吉原嘉市氏が取り、左ソーラは豪者梅岩田代正司氏と村分古賀　誠氏が取り、御酒樽は剛力三人が力を合わせて御酒を注ぎ、八人の豪者剛力達が提川区民の身代となり、速に沛然たる大雨を降らせ給い万物を蘇らせ賜らんことを願いまする。

◎牛洗雨乞祈願の事

往時より提川では旱魃の時に「牛洗い」雨乞いの行事が行われてきました。前述〝当山派山伏由緒〟に「達磨松脇ニ牛ノ形石有リ往古ヨリ自然旱魃ノ砌リハ為雨請右牛石ヲ数石ノ酒ヲ以鯣ヲサワラニ而洗申候得者降雨有之不思議ノ霊石ト申伝候事」とあります。記録によると古くは寛政六年（一七九四）や明治六年（一八七三）、昭和十四年九月に実施され、また最近では平成六年八月七日に行われました。

牛に見立てた巨岩を、酒で洗う男性たち＝伊万里市提川地区

55年ぶり

雨ごいの神事

牛洗い

巨岩見立て　酒で清め

伊万里

[illegible]

1994年(平成6年)8月8日(月曜日)　佐賀新聞